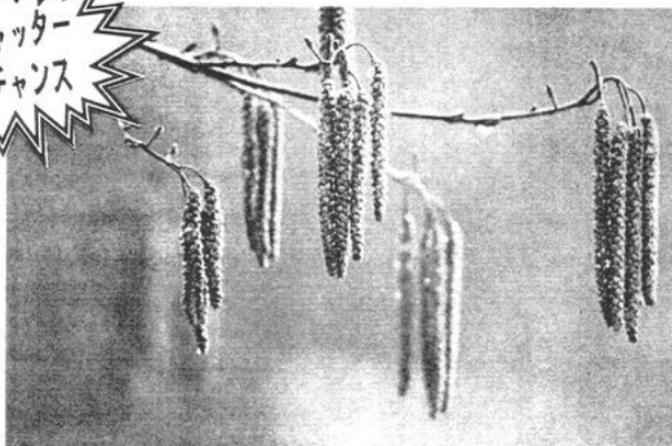


市川自然博物館

2・3月号

（通巻第3号）

だより

シャッター
チャンス

～ハンノキ～

2月、冬枯れの景色の中でハンノキは花を咲かせます。まだ、あたりは大陸からの冷たい空気に支配されていて、蜜を吸うついでに花粉を運ぶ虫たちの姿は見えません。しかし、穂状に垂れ下がったハンノキの雄花は、風に吹かれて花粉を飛ばし、虫の力によらずに葉腋にある小さな雌花へと生命を伝えるのです。

ハンノキは、湿った場所を好みます。しかし、近年は稲作があまり行われず、湿地は役に立たない場所として埋められてしまいます。市内でハンノキを見られる所は、博物館隣の自然観察園など、限られた場所だけになってしまいました。

特集 渡り鳥を

『渡り鳥』で季節を知る

冬から春に向かうこれからの時期、市川ではさまざまな野鳥の「渡り」を観察することができます。

2月の下旬から3月になると、冬鳥たちの美しい夏羽を見ることができるようになります。カシラダカの雄は頭が黒くなり、シメのくちばしも鉛色に変わります。水辺ではユリカモメの頭が黒くなり、一段とおしゃれな姿に変身します。

3月下旬になるとツバメなどの気の早い夏鳥たちが南の国から渡ってきます。市川では、行徳の野鳥保護区で例年3月末に渡来したツバメの群れが見られます。ツバメは渡来後しばらくは、アシ原などで群れて羽を休め、次第に郊外から街の中へと巣作りのために姿をあらわします。自然博物館のある大町では、昨年4月1日にツバメの姿を初めて見ました。市街地の八幡では、その2～3日後にツバメの姿が見られるようになりました。



夏鳥・ツバメ

渡り鳥を初めて見た日を初認日といい、ツバメの初認日は、春の訪れを知る大切な目安になります。今年は、皆さんの身の回りでいつツバメを見ることができるようになるでしょうか。ぜひ注意して観察してみてください。

ツバメなどの夏鳥の渡来と入れ替わりに、冬鳥たちがいよいよ北国へと旅立ちます。渡り鳥が旅立った日、すなわち最後に見た日を終認日といい、やはり季節のうつろいを知る手がかりになります。

4月に入ると夏鳥がぞくぞくと渡来してきます。市川でも山地に向かうメボソムシクイやキビタキ、オオルリ、カッコウ、ホトトギスといった夏鳥の姿を見ることができます。また干潟では、北へ向かうシギやチドリの仲間の旅鳥が美しい夏羽で姿を見せ、羽を休めていきます。こうした渡り鳥は、なぜ日本へ渡ってくるのでしょうか。



冬鳥・オナガガモ

見よう!!



『渡り鳥』ってなあに

鳥の「渡り」とは、卵を産み、雛を育てる繁殖をする地域と、冬を越す越冬地との往来のことを意味します。

鳥を渡りのしかたによって、冬鳥、夏鳥、旅鳥、漂鳥、留鳥、迷鳥の6つのグループに分けることができます。

冬鳥は、秋に越冬のため北方のシベリヤや中国大陸方面から日本に渡来し、春に再び北方の繁殖地へ帰る鳥です。

夏鳥は、春に南方の東南アジア方面から日本に渡来して繁殖し、秋から冬にかけて越冬のため、再び南方へ帰る鳥です。

旅鳥は、日本より北方の繁殖地と南方の越冬地を往復する渡りの途中に、日本を中継地として春秋の一時期だけ出現する鳥です。

漂鳥は、日本の国内の山地や寒地で繁殖し低地や暖地で越冬する鳥で、国内での短い渡り（移動）をするものです。

留鳥は、一年中、同一地域に留まり繁殖や越冬をする鳥です。私達の身の回りで普段よく見ることができる鳥は、大部分留鳥です。

迷鳥は、本来の棲息地や渡りのコースからはずれて、まれに日本に出現する鳥です。

普通、冬鳥、夏鳥、旅鳥を「渡り鳥」といいます。



渡り鳥はどこから来るのかな？

渡り鳥とともに

野鳥は、環境の変化に敏感です。渡り鳥が毎年同じように数千キロに渡る旅をして日本へ渡ってきてくれるかどうか、私達の身の回りや地球全体の環境が無事であるかどうかを教えてくれているのです。

市川・自然探検

～街路樹ウオッチング～

市内には、いろいろな種類の木が街路樹として植えられています。
そのうちいくつかを紹介しましょう。

〔落葉樹〕

●サクラ

植栽に用いられるのは、ソメイヨシノという品種がほとんどです。江戸川・真間川沿いや里見公園が有名。

●プラタナス

別名スズカケノキ（鈴懸の木）。その名のとおり、秋に鈴のような実をつけます。

落葉樹は、他にイチチョウ、ヤナギ、などが植えられています。

〔常緑樹〕

●ヤマモモ

初夏に赤い実をつけ、地方によっては果樹として栽培されます。行徳で多く用いられています。

●マテバシイ

大きな細長いドングリをつけます。街路樹によく用いられます。

●クスノキ

6月ごろ、古い葉をいっせいに落として美しい新緑に衣替えます。

常緑樹は、他にカツカイブキやタブノキなどが植えられています。

〔主な街路樹〕



サクラ

プラタナス

ヤマモモ

クスノキ

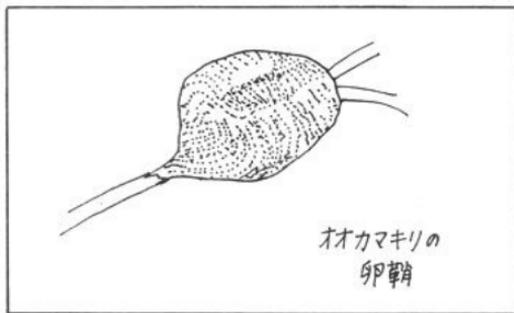
マテバシイ

市川のこん虫



オオ カマキリ

冬、草むらの枯枝に球形で薄茶色をした「泡」のような物をよくみかけます。さわるとフワッとしていてちょうど、昔の駄菓子屋で売っていた「ふ菓子」のようです。これは、カマキリの「卵鞘（らんしょう）」または「卵囊（らんのお）」と呼ばれるもので、カマキ



オオカマキリの
卵鞘

りはこの中に数多くの卵を産み、卵を冬の厳しい寒さから守っています。卵鞘は、カマキリの種類によってその形や産卵場所が異なります。上の絵のような球形の卵鞘を植物の枯枝や茎に産みつけるのは、「オオカマキリ」という大型の種で、市内で最も普通のカマキリです。オオカマキリの卵は翌年の春にいっせいにふ化し、ゾロゾロともものすごい数の赤ちゃんカマキリが、卵鞘からはい出てきます。この赤ちゃんカマキリは、脱皮を繰り返して成虫になります。

むかしの市川 ～その2～

市川の海、その昔

ヨウジウオ

昭和20年代、市川市の南の端はまだ東葛飾郡南行徳町でした。当時の海岸線は新浜御旗場の南の縁、行徳野鳥観察舎、塩浜橋を結ぶ線で、そこには高潮を防ぐための防潮堤が作られていました。

この防潮堤の外は、岸にそってアマモが生え、その先は数キロも続く遠浅の海で、沖の方ではアサクサノリの養殖が行われており、干潮時には広々とした干潟が現れました。この干潟にはアサリやハ

マグリのほか、オオノガイ、サルボウ、マガキ、カガミガイ、オキシジミ、バカガイ、シオフキ、イボキサゴ、イボウミニナ、カニモリガイ、カワアイガイ、アラムシロガイ等たくさん貝のほか、タツノオトシゴやヨウジウオなどのおもしろい形の魚や、恐ろしい毒を持ったアカエイもいました。いろいろなカニやシャコ、アナジャコなどもたくさんいたので。（博物館指導員 玉置善正 記）



自然観察園は水の公園です。中央を流れる水路の水源地は、谷の一番奥の井戸水ですが、東西両斜面のすそからこんこんと湧き出る湧水も、相当な量流れ込んでいます。

かつて谷津田として稲作の行われていた頃は、水路が整備され、水田をうるおす水はこの湧水のみでまかなわれていました。水田が放置され、植物の遺体がたまり、湿地が次第に乾燥化していくと、湧水は枯れてしまいます。観察園ではこの湧水を絶やさないように、枯れたヨシを刈り取り、埋もれた水路を掘り返しました。湧水は再び勢いを取り戻したようです。

湧水の水温は、井戸水と同様に年間を通じて約15℃に保たれていて、冬はぬるいくらいです。水路には今でもカワニナやマジミ、サワガニなどが住んでいます。このような都市部の湿地は、開発の波におされ、ほとんど姿を消しました。



行徳野鳥観察舎

赤い実、大好き

文と絵・蓮尾純子

だより

禽舎近くのトキワサンザシの実、小鳥たちの大好物だ。大柄のドバトは屋根から首をのぼし、届くところの実を青いうちに食べつくしてしまった。まっ赤に熟した実は、茂みの上側からはすぐ姿を消したが、下側ではまだ手つかずのまま残っている。

理由は簡単。茂みの下には猫がよく隠れているので、とげだらけでぎっしりしげった枝をくぐって実をとるには、よほどうまく立ち回らないと命があぶない。でも一年で最も餌が乏しいこの季節には、そんなことを言っではいられない。ヒヨドリやツグミ、スズメなどが入れかわりにもぐりこんでは、用心しな



がら一度に数粒ずつ実をつまんでいる。実がきれいになくなる日も遠くないことだろう。

展示室より

カラスの古巣

カラスの古巣の材料を調べてみるといろいろな事がわかっておもしろいものです。

都市では、カラスも巣材に苦労しているとみえ、木の枝だけでなく様々な材料を使用しています。街なかの鉄塔の上にあった巣を分解してみると、木の枝はわずかで13本ものハンガーや山のような針金などが、くちばしで巧みにかからませてあり、とてもがんじょうです。巣の内側は、卵やひなが傷つくことがないように新聞紙やポリの紐、断熱材のような綿状のものなどを多く使っています。

カラスの巣の材料は、ほとんどが人間がゴミとして捨てたもののようなのです。都会に生きるカラスが、人間のくらしをうまく利用していることに感心させられます。



鉄塔の上にあった巣
(市川市南八幡にて)



草木で遊ぼう

ツバキの草履

草木で遊び、自然に親しみましょう！

ツバキの葉で、すてきな草履ができます。

- ①なるべく幅の広い葉を選び、カッターナイフで葉の表面に図のように切れ目を入れます。
 - ②葉を折り曲げて、葉柄を穴にさしこむと・・・できあがりです。
- 葉の表面が濃い緑で、葉の裏側の淡緑色が鼻緒になるので、とても美しい草履になります。

